



学習評価の未来を展望する : 高度教員養成プログラム特別セミナー報告

森阪, 祐貴 ; 北野, 成親 ; 先山, 直 ; 谷口, 毅 ; ラッシラ, エルッキ タピ
オ ; 山口, 悦司 ; 川地, 亜弥子

(Citation)

教育科学論集, 29:83-84

(Issue Date)

2026-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100503454>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100503454>



学習評価の未来を展望する

ー高度教員養成プログラム特別セミナー報告ー

Finding Future Development of Learning Assessment -The Report of Special Seminar for Postgraduate Certificate Academic Practice-

森阪 祐貴*・北野 成親*・先山 直*・谷口 毅*・エルツキ T ラッシラ**・山口 悦司***・川地 亜弥子***

MORISAKA Yuki, KITANO Narichika, SAKIYAMA Nao, TANIGUCHI Takeshi,

Erkki Tapio LASSILA, YAMAGUCHI Etsuji, KAWAJI Ayako

(*人間発達環境学研究科・博士課程前期課程大学院生) (**同・准教授) (***)同・教授)

キーワード：測りすぎの時代 Age of Metric Fixation、パフォーマンス評価 Performance Assessment、学習としての評価 Assessment as Learning、コンピテンシーの三重モデル The Triple Model of Competencies

1. 趣旨

「評価を、教える側、学ぶ側の双方にとって意味のあるものにすることは可能なのだろうか。そのためには、何が必要なのだろうか。『測りすぎの時代の学習評価論』(勁草書房、2025年)のまえがきには、このような問いが示されている。本セミナーでは、著者・松下佳代氏にご講演いただいた。「測りすぎ」「測りまちがい」を避け、学習者の学びや能力を評価し、「学習としての評価(assessment as learning)」を実現するにはどうすれば良いのか、パフォーマンス評価の理論と実践の両面から議論を深めた。本講演は下記のとおり開催した。

日時 2025年9月26日(金) 17:00~18:30

場所 神戸大学大学院人間発達環境学研究科A棟4階A427と
Zoom ミーティングの併用

講演

- ・松下佳代氏(京都大学大学院教育学研究科・教授)
「測りすぎの時代に意味ある学習評価を行うにはーパフォーマンス評価の理論と実践ー」

指定討論

- ・森阪祐貴(神戸大学大学院人間発達環境学研究科・博士課程前期課程大学院生)
- ・谷口毅(同・博士課程前期課程大学院生)

司会

- ・川地亜弥子(同・教授)
- ・北野成親(同・博士課程前期課程大学院生)

記録・運営

- ・先山直(同・博士課程前期課程大学院生)

松下氏に、本誌への講演記録掲載をご快諾いただき、ここに一般読者にも公開する次第である。松下氏のご好意に心より感謝申し上げる。

2. 講演者の紹介

松下 佳代(まつした かよ)

京都大学大学院教育学研究科教授、博士(教育学、京都大学)。群馬大学教育学部助教授、京都大学高等教育研究開発推進センター助教授、教授を経て、2022年10月より現職。

専門は教育方法学。主な研究テーマは、能力・学習・評価で、大学、高校・中学校をフィールドに研究と実践支援を行っている。

日本カリキュラム学会代表理事、大学教育学会会長、中教審大学分科会臨時委員、日本学術会議連携会員などを務める。

主な著作は、『〈新しい能力〉は教育を変えるか』(編著、ミネルヴァ書房、2010年)、『ディープ・アクティブラーニング』(編著、勁草書房、2015年)、『対話型論証による学びのデザイン』(単著、勁草書房、2021年)、『ミネルバ大学を解剖する』(編著、東信堂、2024年)、『ライティング教育の可能性』(編著、勁草書房、2025年)など。

3. 『測りすぎの時代の学習評価論』

本セミナーでは、『測りすぎの時代の学習評価論』(勁草書房、2025年)を基にご講演いただいた。本書は大学教育を念頭に書かれているが、初等中等教育にも通底する重要な内容である。ジェリー・ミュラー『測りすぎーなぜパフォーマンス評価は失敗するのか?ー』(みすず書房、2019年)(原題: The Tyranny of Metrics)の提起を踏まえて書かれている。ミュラーはメトリクス(測定、測定法、測定基準、測定値)が社会のあらゆる領域に入り込み、悪影響をもたらしていることを問題視し、メトリクスの暴政の影響を小さくするための実践的な提言をしている。ただし、松下氏は、邦訳の副題「なぜパフォーマンス評価は失敗するのか?」について、誤解を招くものだとして指摘する。なぜなら、performance assessmentは1箇所引用の形で出てくるのみで、パフォーマンス評価批判の本ではないためだ。

松下氏は、『測りすぎの時代の学習評価論』を通して、メトリクスとパフォーマンス評価は異なること、測りすぎの時代にこ

そパフォーマンス評価が重要であることを示している。プログラム参加者を中心に本書を読み深め、事前の学習会を開催し、講演会に臨んだ。

4. 指定討論の概要

講演（詳細は本誌掲載講演記録参照）をふまえ、森阪・谷口から指定討論を行った。「初等中等教育と高等教育の境界を越える」（松下, 2025: 235）ことを目指し、教師教育の視点も加えて議論を展開した。

森阪からは、「コンピテンシーの三重モデル」に基づいて学習評価を行う際の、評価の観点およびその観点の、形成的評価の場面と総括的評価の場面での違いについてお尋ねした。

これは、PEPA (Pivotal Embedded Performance Assessment: 重要科目に埋め込まれたパフォーマンス評価) のような高等教育での取り組みを、初等中等教育にも応用できないかという考えを背景にしていることである。現在、初等中等教育においては、学習指導要領改訂に向けた議論が進んでおり、「学びに向かう力、人間性等」を個人内評価で行うこと、「知識及び技能」と「思考力、判断力、表現力等」のタテとヨコの関係を可視化することなど、評価についての方向性が見直されている中で、重要な提起である。松下氏は本書で、「コンピテンシーの三重モデル」を用いて、学習指導要領の「資質・能力の3つの柱」のねじれを指摘している。具体的には、①「思考力・判断力・表現力」は「知識」「スキル」「態度・価値観」を組み合わせて発揮されるもので、本来「コンピテンシー（狭義）」の層に位置づくはずが、知識や技能と同じ層に位置づいていることと、②もともと異なるカテゴリーであるはずの「知識」と「スキル」が「知識及び技能」として一つの柱に位置づいていることの2つである。昨今の政策動向と松下氏の論を踏まえ、何をこそ総括的評価場面で評価し、何は形成的評価にとどめるべきかについて、「コンピテンシーの三重モデル」を基に、どのような観点を設定し、どのように評価することができるかということをお尋ねした。

松下氏からの回答は以下のとおりであった。「コンピテンシー」には、「知識」も「スキル」も必要であり、英語や芸術系などでは特に「スキル」も重視される。「知識」や「スキル」さらには「態度・価値観」が結集されたものとしての「コンピテンシー」が作品・実演として表れる。したがって、「コンピテンシー」だけでなく「知識」「スキル」の層でも総括的評価・形成的評価の両方が必要になる。その際、総括的評価において、「知識」だけを見る、「スキル」だけを見るということはあってもよい。実際に、大学では、講義科目において知識を見ようとし、実習・実技科目においてスキルを見る、ということがある。ただし、「知識」と「スキル」は本来分けたほうが良いものの、切り分けることが難しい場合もあるため、「知識・技能」という一つの観点になったのだろう。

一方、具体的な評価の方法として、PEPAで行っているように、知識やスキル、態度・価値観を結集して「コンピテンシー」を発揮する機会を、カリキュラムのところどころで（少なくとも

学年に1回くらい）設定し、パフォーマンス評価を行うことが重要である。例えば、部活動でいえば合唱コンクールのような場がそれにあたる。ただし、「態度・価値観」については、評定になじまない一方で、学習者を励ますというようなことはできるため、形成的評価にとどめることが望ましい。次期学習指導要領に向けて、態度を個人内評価でという方向性が議論されているが、そこには賛同する。今後の具体的な形（観点に書くかどうか、観点には残しても3段階評定はしないのか、など）はまだ決まっていないため、今後の議論を見守る必要がある。

谷口からは、まず、評価全般について、経験的に言えば、生徒たちは自分のどの分野に強みがあり、さらなる改善分野はここであるといったような記述のあるルーブリックや成績表を喜び、数字では評価しきれない自分なりの発表の「思い（深く柔らかな部分）」に評価が触れることで、評価が一過性のものではなくそれ以降の活動や人生に前向きに取り組み出せるようなものとしてフィードバックできるとの所感をお伝えした。

続いて、教員が抱える課題として、説明責任を果たすためだけの評価に陥ることもあり、評価の一貫性と継続性には努力と工夫が必要なのではないか、ということをお伝えした。その解決の糸口として、Peter Elbow の good enough evaluation（ほど良い評価）の考え方を知り、プロダクトに対する質の評価と取り組み（プロセス）に対する努力評価の組み合わせという発想があると、松下氏の著作から学んだからである。そのうえで、高等教育機関の教職教育担当者が「評価」をどう学び、学生にどう「教え」ているのかについてお尋ねした。

松下氏からは、高等教育機関での評価の教育について、評価課題や子どもの作品を目の前にして、複数の人で評価基準を作り、実際に評価してみることの重要性が述べられた。子どものパフォーマンスには子どもの思考や表現がよくあらわれる（松下, 2007）。最初はパフォーマンスを見てもよくわからないが、繰り返し見て、他の人と解釈や評価をつき合わせるなかで、教師の見る目（鑑識眼）が養われる。学生自身が自分のパフォーマンスを自己評価したり、ピア評価をしたり、それらを教員の評価とつき合わせたりという機会から学ぶことも多い。教員になって初めて経験するよりも、学部の教員養成で、さらには大学教育全体の中で行われると、パフォーマンス評価を通して子どもの作品を評価するときにも有用ではないかと回答いただいた。

今後の学習評価のあり方を展望するうえで、重要で力強い提案と議論をいただいた。教育における評価は、忌避されたり必要悪と考えられたりする傾向があるが、学習者の成長や発達に欠かせないものとして展望することが重要である。

引用・参考文献

- 松下佳代（2007）『パフォーマンス評価—子どもの思考と表現を評価する—』日本標準。
- 松下佳代（2025）『測りすぎの時代の学習評価論』勁草書房。
- ミュラー, J.Z. 著、松本裕訳（2019）『測りすぎ—なぜパフォーマンス評価は失敗するのか？—』みすず書房。